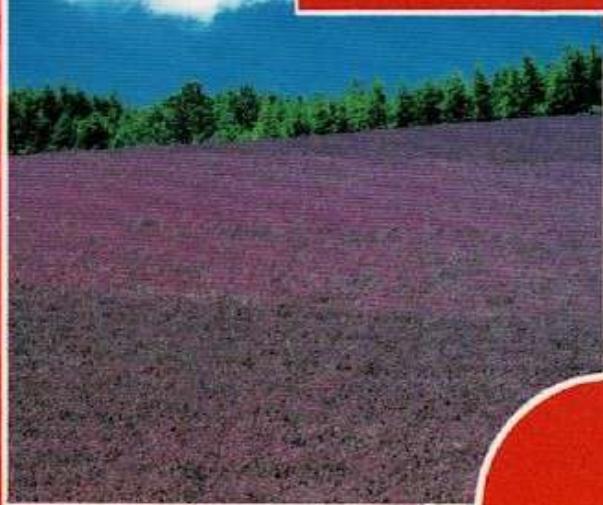
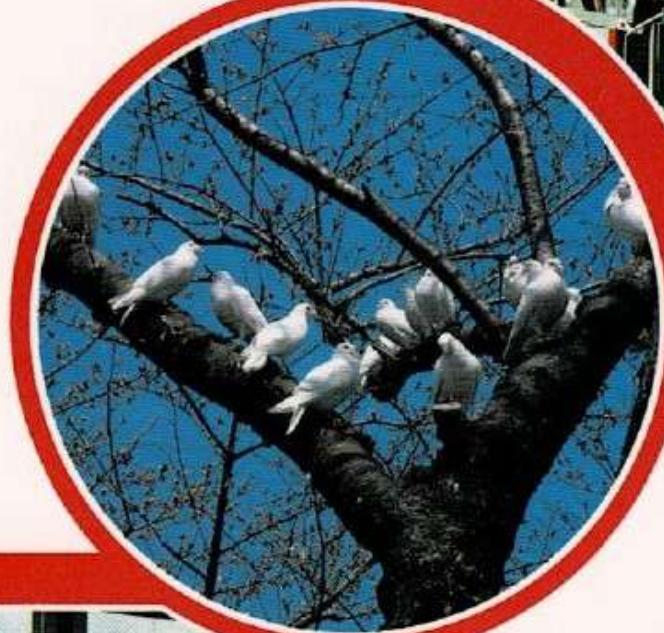
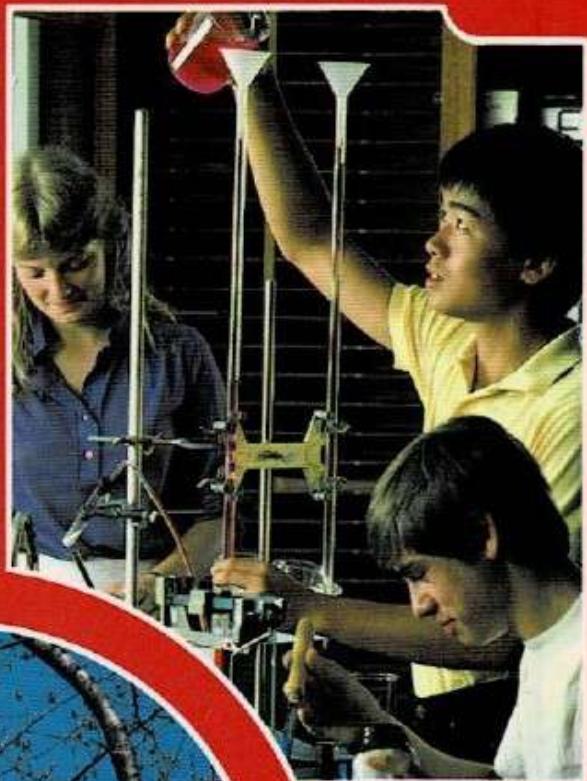
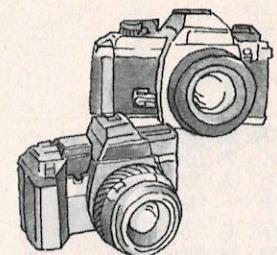


私たちの生き方

2



創育



12

私の自立を語る

私がジャーナリズムに興味をいだいたのは、大学受験をひかえたときでした。私の周りの人は、数学が好きだから数学科へ行くとか、弁護士になるからどこの大学へ行くというように、受験の方向をしつかりもつっていましたが、私には特に好きなものがない。何か一生けんめいにやれば、それでおもしろいし、栄養学も数学も物理も、化学にも興味がある。ということは、私は何か興味さえもてば、その好奇心がエネルギーになつていくタイプだと気がついたんです。

これを生かせる職業は何かというとジャーナリズムではないか。他の人たちはスペシャリストを志している。でも私は、体にたとえると、心臓とか肝臓かんぞうになるのではなくて、それらすべてを自由に行き来できるもの、人間全体をつかまえてみたい、と。その全体というのが、"世界"だろうと思いました。

それで、ジャーナリズム科のある大学へ入ったんですが、勉強しているうちに映像メディアの

インパクトはすごいと思いました。ただ、テレビというのは、すばらしいマンパワーとスタッフ、いい機材、すべてがそろわないと自分が思う通りには使いこなせない。その点、フォト・カメラなら自分の行くところはどこへでも連れていける。百万言ついやしても言いつくせないことを、ワンカットで表現してくれる。たとえば"ヒロシマ"にしても、子供が泣き母親がさまよつている光景を写した一枚の写真が、どれだけ多くのことを私たちに伝えてくれることか。そんなビジュアルなメディアを、自分で使いこなせる人間になりたいと思ったのです。それで、フォト・ジャーナリストをめざしたのが、大学四年のときでした。

競争で新聞社へ売りこむ

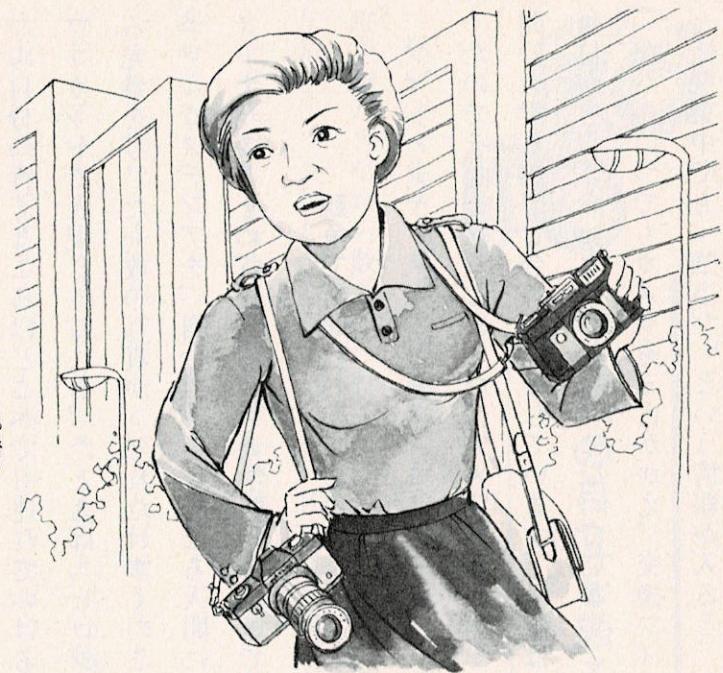
フォト・ジャーナリズムを学ぶにはアメリカが一番というわけで、たまたま交換留学の話があつたのでそれを希望しました。アメリカの大学というのは、ものすごく実践的で、しかも地方新单位がもらえないという仕組みになっています。だからいつでもカメラを二台かかえ、交換フィルムのカセットを持つて講義を受けに行く。たとえ授業中でも「強盗だ」という情報が入ると、ダーツと飛んで行つて、写して、取材して、す

ない。生半可に理論を学んできた女なんていちばんあつかいにくい。うちは体育系の体がじょうぶで根性のある男をやとつて、わが社のたましいをたきこみます」と言うのです。

愕然^{がくぜん}としました。アメリカは、女だって重い機材をかついでロケに出かけるわけですから。いい写真を撮るのに男と女のちがいなんて関係ない。どうして男でなければいけないんだろう、と思いました。

その後雑誌の仕事をフリーでやっているときに、海外アーティストの通訳をしたのがNHKの人との出会いです。『海外ウイークリー』のキャスターを三年間やって、一昨年『サンデー・スポーツ』のキャスターになりました。ただ、スポーツキャスターというよりも、私自身はブロード・キャスターという意識があります。

スポーツの世界がもつエネルギーはすごいと思います。たとえば、スポーツは今や“勝負の世界”というだけではなく、国際交流のための“政治”でもあるし、場合によつては“ビジネス”でもあります。“宣伝メディア”でもあります。ですから、それを報道するときに、私流のジャーナリスティックな目が生かされていれば、スポーツであろうと政治であろうと同じだろうと私は思っています。



私流のジャーナリストイックな目

ぐに暗室へ入り現像しながらタイプで記事を書く。プロと同じような仕事をこなしていくわけです。それから、自分の作品をデスクに売りこむ。「かれのもいいけど、私の写真のここを見てくれ」と。

それで翌朝の新聞にだれのが出るか、ドキドキしながら夜を過ごすのです。朝の三時に飛び起きて新聞を取りに行く。Tomoyo Nonakaとクレジットされて、私の写真がのつたときは、「やつた」とれしかつたですね。

人間は一人では生きられない

今年の七月から名古屋のT女子大学の客員教授を引き受けました。私の最初の講義が「国際化時代の女性の自立」について。自立する女性というとキャリア・ウーマンで、仕事をバリバリこなしている人というイメージがまずあるが、でも私はそうは思いません。

人間は一人では絶対に生きていけない。悲しいときは「悲しいよ」と言い、「そりだね」と言つ

てくれる人がいてこそ、「明日もがんばるぞ」という気持ちになれる。うれしいときも相手がいて、その喜びを分かち合うことで幸せを感じられる。それは男性であれ女性であれ同じはずです。

だから、スタンドポイントとしての共通項は、「人間」ということ。ところが、日本の伝統や歴史は「女は三歩下がつて」と教えてきたし、女はいい男を見つけてリードしてもらうことが幸せで、男はがんばつていい女を見つけて引っぱっていく



インタビューを受ける野中ともよさん

のが甲斐性だ」というのが通念として、また価値観として認められていました。

しかし、リードしてもらいたい男もいるし、引っぱりたい女もいる。幸せという概念は個人個人でちがうもの、それを社会が規制するのは、おかしい。男性とか女性とかいう前に、まず「人間の自立」がなされるべきだと思います。

自分がどんな人間であるか、ということをみがいてほしいと思います。自分は何をしたいのか、何ができるのか。どこが強くて、どこが弱虫か。それが理解できれば、どんな男性が自分にふさわしくて、どんな仕事が自分に適しているかということがよくわかります。自分に対して真摯に取り組むアンテナをもつている人は、同じように真摯に取り組むパートナーを見つけることができるし、仕事の道も開けます。その上で、個性的な自分をどんどんみがいていってほしいと思います。

(野中ともよインタビュー記事による)

▼考え方

- 1 筆者は、自分をどのような人間だと思っているのだろうか。
- 2 筆者の写真が新聞にのったとき、「やった」とうれしかったのはどうしてか。
- 3 キャスターとして筆者は、どんなことを感じているのか。

ひとり

地上には
大小の道がたくさん通じていて。
しかし、みな

目ざすところは同じだ。

馬で行くことも、車で行くことも、

ふたりで行くことも、三人で行くこともできる。

だが、最後の一歩は

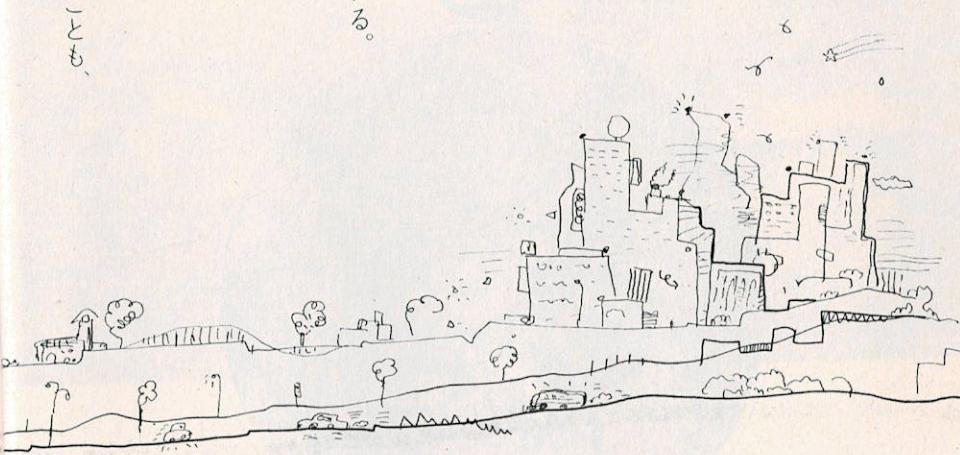
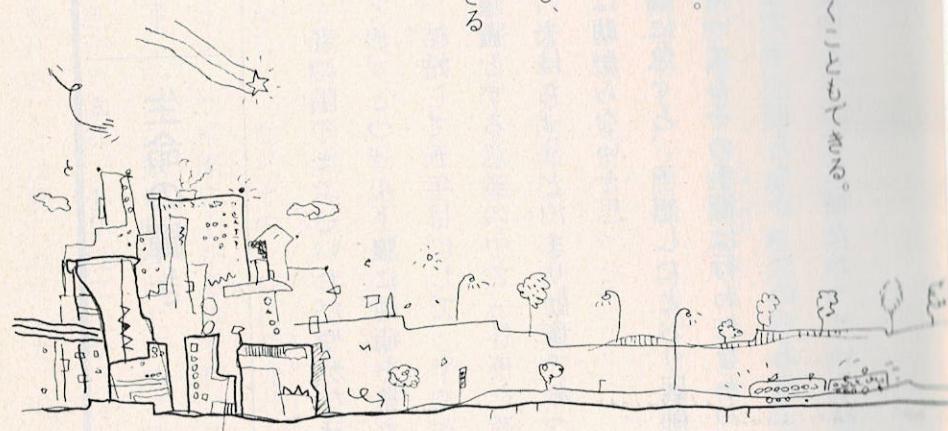
自分ひとりで歩かねばならない。

だから、どんなつらいことでも、

ひとりですることにまさる

知恵もなければ、

能力もない。



もくじ

生命の輝き……

野の花のように……

三つの金メダル……

イギリス国民気質……

黄色い弁当箱……

父が作った橋……

わが母校、桜中学……

自分は自分だからよい……

求めてばかりいないで……

橋本さん……

ウミガメと卵を守れ……

私の自立を語る……

蕗のとう……

不時着に備えた放送メモ……

68 60 54 50 46 42 38 34 30 26 22 14 8 4

わが家のケヤキ……

辞書引き大会での出来事……

二度としない……

対話なき子の群れ……

雨の日の会話……

地図のある手紙……

旅で出会った人たち……

親友について……

大雪山に雪を撮る……

茶わん開眼……

さすが優等生……

日本人としての自覚……

明かりの下の燭台……

祖母に学ぶ……

日本と私……

マザー・テレサ……

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15
138	134	130	126	122	118	114	108	104	100	94	88	84	80	76	72